
とある通行人の悲劇

三毛猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある通行人の悲劇

【Nコード】

N0524BA

【作者名】

三毛猫

【あらすじ】

能天気なお気楽幽霊少女と、その復讐に巻き込まれたとある通行人の悲劇。全18章。

以前t e x p oにて公開していました。現在p i x i vにて公開中です。

1、とある通行人Aの日常

早瀬 あきら 高校二年生（17）

章ごとに語り手が変わる書き方になっています。語り手は各サブタイトルを参照下さい。

短い掌編、短編を連ねてひとつの出来事を語る変則的な構成になります。

またジャンルは推理としましたが、犯人を推理するようなお話ではありませんのであらかじめご了承ください。

休日の午後、日課の体力作りのためにジョギングに出かけた。

いつものジャージとTシャツを着て、それからスポーツタオルを首にかけた。

まだ梅雨も始まっていないということにお日様がかんかん照りで、日射病とか危ないかなと思ったので、ベルトポーチに氷を入れたスポーツドリンクを用意した。

いつもの川原のジョギングコースに向かい、2キロのコースを3週ほどしたところで、今日はもうちょっと、先まで行ってみようかなという気になった。

小さい頃からこのジョギングコースはよく走っているのだけれど、なぜか、どうしても足が進まない場所というものがあって、5キロのコースに行ったことは無かった。

だけど、今日はなぜか、いつもの2キロコースの先を見たいと思った。

少し休憩をして、スポーツドリンクを半分ほど飲んでから靴紐を結び直す。

ちよつと、全力で走ってみよう。

スタートラインに立って、よいどん。

思いつきり走ると、風が気持ちよかった。

あたしは日高真昼。現在進行形で幽霊やってます。まる。

よくわからないけれど、気がついたら空中をふわふわ漂ってました。

なんで、あたし、化けて出てるんだらうね？

ふわふわと空中を漂っていると、川原のジョギングコースをこちらに向かって走ってくる少年の姿が見えた。下は紺のジャージのズボンを履いて、上は無地の白いTシャツを着ている。

紺のジャージは、ありふれたものだったけれど、もしかしたらあたしの学校の指定のジャージかもしれないと思った。ジョギングにしては、けっこうスピードを出している。見ているうちに、あたしの下を通り過ぎていってしまった。

なんだろう、どこかで会ったことがある気がする……？

はつきりとはわからなかったが、初めて見る顔なのになぜかなつかしいと思った。

何か気になって、もう一度顔をはつきりと見てみたくて、あたしは少年を追いかけることにした。あたしは幽霊なので足が無いんだけれど、それでも必死に空中を泳ぐようにして、えいや、えいやと少年の後を追いかける。なかなか追いつけなくて、ようやく追いつけた時にはすっかりあたしは疲れ果てていて、しょうがないので、最後の力で、えいやー、とばかりに背中から覆いかぶさるようにして少年の首に手を回して後ろから抱きついた。

ああ疲れた。幽霊でも息が切れるなんて知らなかった。

軽い幽霊の体は、風に吹かれたように地面に平行になっている。

すっごい、すぴーどだよね。

後ろから少年の首をぎゅうぎゅうと絞めるような形になっているのだけれど、少年はまったく気がついていない様子はない。

やっぱり、誰もあたしに気がついてくれないんだなー。

そう思いながらよいしょよいしょと少年の頭をよじ登るようじして、少年に肩車してもらう形になった。

うん、楽ちん楽ちん

少年の頭に抱きつくようにして、サービスとばかりに胸をぎゅっと押し付けてみる。

こんなことをしても、全然気付かないのがなんかムカつく。

どうせ、気付いてはくれないんだけどね……、と思いながら、制服のスカートをバサリと少年の頭にかぶせてみたら、「わあっ！」と叫んで少年が転んだ。それはもう見事に少年がこけた。

あたしはすぐに少年から飛びおりて宙に浮かんだのだけれど、少年はごろんごろんと転がって、ジヨギングコースの脇の茂みにつっこんでようやく止まった。

『生きてる？』

偶然、なのかな？ まさか、あたしに気付いたなんてことはないよね？ と思いつつも奇跡を期待して少年に話しかけてみる。

「あんまり、大丈夫じゃないな……生きてはいるけれど」

少年は擦り剥いたらしい右肘を押さえながら立ち上がって言った。それから、あたしの方を見て、それからちよつと首をかしげて「あれ？」と言った。

「なぜ君は、地面に足がついてないの？」

『幽霊だからかな？』

あたしが答えると、少年は空を見上げて

「まだお日様カンカンに照ってるんだけど？」と言った。

『お昼に化けて出ちゃわるいつていうのかな？』

川原のジヨギングコースには外灯が無いのでこの辺りは夜には真っ暗になるのだ。いくらあたしが幽霊とはいえ、夜中にそんなところに一人でポツンと佇むのはちよつと遠慮したい。

「悪い。心臓が悪い。常識的に悪い。何もかも悪い」

少年はそう言って、ずざざつと音を立ててあたしから距離をとっ

た。

「幽霊が、僕に何の用？　っていうか、走ってた時いきなり目隠したのってキミなの？　まさか僕を取り殺す気じゃないだろうね？」
警戒した様子で少年が言った。

『その前に質問。キミ、霊感とかある方？』

「幽霊なんて見たのは生まれて初めてだよ！」
なるほど。

あたしはふわふわと浮いたまま少年を見つめる。

霊感とか、そういう物が無いのに幽霊を見る可能性があるのは、幽霊の血縁か、もしくは縁の深い者だけだっという話を聞いたことがある。まったくの初対面のはずだけれど、この少年とあたしには、きつと何らかの係わりがあるはずだ。

まずは自己紹介からはじめよう。

『あたし、日高真昼。キミなんていうの？』

「……僕は早瀬あきら」

言われて思いだした。初めて顔を見たときから誰かに似ていると
思っていたのだけれど、早瀬先輩に似ているんだ。確か先輩には学
校は違うけれどあたしと同じ高校二年生の妹がいるって聞いたこと
がある。でも目の前の少年は、男の子だし、中学生くらいっぽいし、
無関係……だよね？

『あたしのこと、知ってる？』

「知らない……けど。君、なんか有名な人だったりするの？」

『あ、そういうのじゃなくて。あたしのほうがなんかキミに似た
人にあつた覚えがあつて、あたし死んじやってからなんかいる
記憶あいまいなどころがあるから、もしかしてキミがあたしの知り
合いだったりするのかなって』

「……記憶にはないんだけど、実は僕の方もあんまり君に初めて
会った気がしない」

少年は何か自信なさげにあたしの顔をしげしげと見つめている。

「もしかしたら、どこかで縁があつたのかもしれない」

『ほら、妖怪は場所についてるから領域に入った人なら誰でも襲い掛かるけど、幽霊は縁のある人か、恨みのある人の前にしか現れないっていうじゃない?』

「そういうもんなの?」

少年はあまりそつち方面の知識には明るくないらしく、首を傾げていたが、急に思いついたように言った。

「あれ、もしかして、君、事故とかじゃなくて、殺されてたりする……?」

『えーっと、どうなんだろう?』

あたしは自分の体を見回してみる。鏡がないから顔がどうなってるかは分からないけれど、胸とお腹が血だらけな気がする。制服の上に真っ赤なコートを着ているのであんまり目だっていないようだけれど。

「……君の、最後の記憶は?」

言われて、自分の最後を思い出そうと努力してみる。

『夜、学校から帰る途中で、後ろから何か口にあてられて……それつきり?』

これだけじゃ何がなんだかだけれど。

『たぶん、この辺で死んだんだと思うけど……ニュースとか新聞とかでやってなかった?』

「こころで人が死んだなんて話聞いたこと無いよ?」

『ふうん、もしかして、まだ死体見つかってないのかも?』

あたしはこの辺りをふわふわと漂っていたわけなんだけれど、自分の死体がどこにあるのかすらわかっていない。何しろ暗がりであるからハンカチを当てられて、気がついたらこうしてふわふわと漂う状態になってたわけなので。思い出せる状況から考えると、事故じゃなくて誰かに殺されたとしたか考えられないんだけれど、なぜ、誰に殺されたのかもまったくわからない。

誰かの恨みを買った覚えはないんだけど。

ふと、あきら少年の右手の薬指に包帯が巻いてあるのに気がつい

た。

『その右手の包帯って？』

「体育の授業でバレーやってつき指したんだけど……それがどうかしたの？」

なんだろう、何か引つかかる。

ふっと、顔にハンカチを当てられた時のことが思い浮かんだ。

縁の深い相手……。あたしを殺した相手、っていうのも縁なのかもしれない。

あたし、たしか、あのと意思いつきりハンカチに噛り付いて。

幽霊っていうのは、恨みのある相手の前に化けて出るのが筋ってものだよね……。

それにほら、犯人はかならず現場に戻ってくるとかよくいうじゃない。

状況証拠しかないけれど、この少年があたしを殺した犯人の可能性って、けっこうあるんじゃないかな？

決めた。あきら少年、犯人に決定。

『あの、さ。ちょっとお願いがあるんだけど、聞いてくれない？』

「……なに？」

『あたしのうちにさ、伝言お願いしたいんだけど、頼める？』

あたしがつこりと微笑んで言うと、あきら少年はなんだかびくつ、と警戒するように身をすくませた。失礼な。

「君にそういうことを頼まれる筋合いなんか、無いはずだけど？」

なんで、ボクがそんなことしなきゃならないのさ？」

『あたしのこと見えるのがキミだけだからに決まってるじゃん？』

本当はキミを糾弾するただけだね。

腕組みしながら口を尖らせて言うと、あきら少年は押し黙ってしまった。

さすがに反論しようが無かったみたいだ。もしかしたら呆れてるだけかもしれないけれど。

「……」

『あ、もしかしてキミ、タダじゃ何もしない主義の人？』

「そんなことは無いけれど……」

『あー、でもあたし幽霊だし何も持ってないから何のお礼もできないねえ』

何かあたしに、あきら少年にして上げられることがあるだろうか
と考えてみる。

「別に何の期待もしてないよ」

そういうあきら少年の視線が、ちらりとあたしの胸元をかすめた
気がした。

おー、そうだ。あるではないか。幽霊のあたしにでもできる事！

『んー、キミ、女子高生のおっぱいとかみたい？ 幽霊だから物理
的なお触りは無理かもだけど』

「ちよ、ちよっと?!」

着ている真っ赤なコートの前を開けようとして、ふと気がついた。

『あ。あたしたぶん、胸刺されて死んだから血だらけだけど、大丈
夫？』

「う、」

あきら少年がぶるんぶるんと首を横に振った。

どうやらスプラッターな感じのものはお気に召さないようだ。

『じゃあ、ぱんつとかどうかな？』

スカートの裾を持ち上げながら、あきら少年に流し目をしてみる。
「いやだから、」

『あー。下腹もざくざく刺されたっばいから、たぶんぱんつも血で
真っ赤っかだけど、やめとく？ ていうかそれ以前に幽霊だから下
半身透けちゃってて見えないかなー？』

「ぶっ！」

あきら少年が真っ青な顔でふきだした。

「さつきから気になってたんだけど、君のその真っ赤なコートって
もしかして血で染まったせいだったりする？」

『んにゃ。これは元から真っ赤だよ』

そういえば、このコートって借り物だったんだよね……早苗になんて謝ったらいいんだろう。

『まあ、あたしんちに着いたら何かお礼できるかもね。ということ、うちまで案内するからあたしについてきて』

あたしはあきら少年にそう告げて先に歩き出した。といっても足が無いので空中をふよふよとだけれど。

「僕まだOKするって言ってないんだけど……？」

あきら少年が不服そうに言ったけれど、ついてきてる時点であたしはOKしたものとみなしてるのです。

『パンツの一枚や二枚持っていていいよ？ どうせもう、あたしが履くことも無いしね』

「いやだから、」

あきら少年が何か言いかけてやめた。

どうやら観念したようだ判断し、あたしはなつかしの我が家へと向かうことにした。

幽霊に案内されて到着したのは、立派な一軒家だった。小さいながらも庭まで付いている。意外と裕福な家庭なのかもしれない。

「ここなの？」

背後の幽霊少女に尋ねてみたが、真昼はなぜか首をかしげていた。『なんか、しばらく見ない間にずいぶんと変わった気がする……？』表札を確認してみると、日高、とある。

「表札は日高で間違いないみたいだけれど」

わたしが表札を指差して言うと、幽霊少女は表札に見覚えがあったらしく、にっこり微笑んだ。

『うちの表札でまちがいないよ。ほら、はやくピンポン押しちゃって！』

幽霊の少女に急かされるままに玄関のチャイムを押すと、中から母親にはずいぶんと若い感じの女の人が出てきた。

「何の御用かしら？　うちの息子のお友達？」

女性はそう言って柔らかい笑顔を浮かべた。

その女性を見て、背後の真昼が『誰……？』ってつぶやいたのが聞こえた。

振り返って背後の幽霊少女に確認したかったが、人前でそんな奇妙な振る舞いをするわけにもいかず、わたしはちよっと考えながら、「あの、こちらは日高さんのお宅で間違いないでしょうか？」と目の前の女性に問いかけた。

「ええ。そうですね」

目の前の女性が答えると、背後の幽霊少女が『あたしこんな人知らない』と言った。人前だったがしようがないので、背後を振り返って「お母さんじゃないの？」と小声で尋ねると、はっきり『違う』という言葉が返ってきた。

わたしはどうしたらいいのかわからなくなって、「どうするの？」

って幽霊少女に聞いたら『……こういうのは想定外』って言葉が返ってきたので、しょうがないのでわたしの独断でやることにした。

「……あの、うちに何か？」

人前で後ろを向いてなにやらボソボソ独り言をいう姿があまりに不審だったのだから。偽・日高母（仮称）が、ためらいがちにわたしに声をかけてきたので、幽霊少女は母親じゃないといったが、この人を真昼の家族と想定して話を進めることにした。

両手を体の前で重ねて、深々と頭を下げる。

「直接知っているわけではないのですが、こちらのお宅のお嬢さんからの伝言を承ってきました」

頭を下げたままの姿勢で、顔だけを上げて続ける。

「あの、変なことを言っていると思われるかもしれませんが、本当のことなんです」

わたしが言うと、偽・日高母はますます不審気な様子で、わたしのことをじろじろと見つめだした。それから、「あの、ちょっと、お待ちくださいいね……」と言ってそそくさと奥の方へ引っ込んでいってしまった。

『あー。もしかしてお手伝いさんとか雇ったのかな？』

「そういうことは早く言ってよ」

今頃、そんなことを言うので、触れないとわかってはいるものの背後の幽霊少女の頭に拳をぶつける。手には何も触れた感覚はなかったのだけれど、真昼は『いったー』と言って痛そうに頭を押さえ、てわたしをにらみつけた。

『なんでキミ、あたしのことぶつのさー！』

「ボクには何かにぶつかった感覚なかったんだけど、痛かったんだ？」

やっぱり、わたしとこの幽霊少女との間にはなんらかの縁があるのだろうか？

『おかえしじゃー』

言いながら幽霊少女がわたしの頭にぽかぽかと殴りかかるが、何

もあたたつた感じはしない。

「全然痛くない」

もしかしたら密度の違いとかそんな感じなのかもしれない。
そんなことを考えていたら突然声をかけられて驚いた。

「うちの家の娘からの、伝言があるそうですね？」

声に気がついて向き直ると、メガネをかけた若い男性が玄關に立っていた。

真昼と殴りっこをしていて気がつかなかったようだ。

『あ、おとーさんだ！ お父さん、だよな？』

真昼はそう言って、わたしの前に飛び出したが、目の前の男性には真昼が見えていないようで、じっと、わたしの方だけを見つめている。

しょぼんとした様子で、真昼がわたしの背後に戻り、

『家族でも、あたしのこと、見えないんだね……』とひどく寂しそうに言った。

幽霊少女が家族と認めたようなので、とりあえず目の前の男性に向かつて一礼をする。

「はい、ええと、どう説明したらいいものやら……」

何から説明したものが、と背後の幽霊少女をちらりと見やる。

言いよどんでいると、日高父の方からわたしに話しかけてきた。

「うちの娘というのは、真昼、のことだろうか？」

「……はい」

どうやら、幽霊少女の伝言の相手はこの人で間違いないようだった。

『あきら、お願い、あたしの言った言葉をそのまま伝えてちょうだい』

無言でうなずくと、真昼は呼吸をしているわけでもないだろうに、思いつきり息を吸って、それからゆっくりと吐き出した。

『ご存知かもしれませんが、日高真昼は、既にこの世にはいません

……』

「……ご存知かもしれませんが、日高真昼は、既にこの世にはいません」

最初から、重い言葉だった。

わたしが真昼に続けて同じ言葉を繰り返すと、日高父は口元を押さえた。

「そうだろうと思ってはいましたが、はっきりと告げられると……やはり苦しいものですね」

日高父が感情を抑えているようだったので、真昼とわたしは少し、時間をおいて続けた。

『生前に残した手紙がこの家に残してあります』

「生前に残した手紙が、この家に残してあるとのことです」

わたしの言葉に、日高父は何かを思い出した様子だった。

「あれだろうか……？」

『隠し場所はA-30つて、あー。お父さんじゃわからないか。あたしの部屋の天井裏って伝えて』

「真昼さんの部屋の天井裏にあるそうです」

わたしがそう言うと、日高父は一度わたしをじっと見つめながら、「ひとつ聞いていいかな？」と言った。

「なんでしよう？」

「君は、真昼とどういった関係……。いやすまない、君が真昼と関係あるはずもないか……」

日高父は、少し考えこむようにして、それから首を左右に振った。「すまないが少し待っていてくれないか」

日高父はそういって、二階へ向かう階段を上り始めた。真昼の部屋は二階にあるのだろう。

しばらく待つと、二枚の封筒を持って日高父が階段を下りてきた。「おそらく、その手紙というのはこれのことだと思う」

『そうそう、それぞれ！』

背後で幽霊少女が答えた。

「片方には家族へ、もう一方は、この手紙のありかを伝えてきた者

の前で読むこと、とメモ書きが付いていた。だから、こちらの方を君の前で読むことにする」

日高父は、そう言って片方の封筒の封を切った。そして中から便箋を取り出しながら、また先ほどのようにわたしのことをじっと見つめた。

「不思議だな。君に会ったことは無いはずなのに、誰か、昔の知り合いに似ているような気がする」

『あれ、お父さんもそう思うの？』

「……すまない、君の名前を聞いてもいいだろうか？」

言われて初めて自分が名乗っていないことに気がついた。

「ボクの名前は、早瀬あきらといいます」

「早瀬……いや聞き覚えは無いな……。君はいつたいなぜ、このうちを訪ねてきて、真昼の伝言を届けるなんていうことをしているんだい？ ……そうだな。真昼のことだから、学校の図書室の、本の中に秘密のメモが隠してあって、それをたどるとうちに来たとか、そういう感じだったりするんじゃないだろうか？」

『……』
後ろの幽霊少女が頭をぽりぽりとかいている。そういうこともやっつてたらしい。

ちらりと背後を見やって、目で問いかけると、真昼がこくんとうなずいたので、わたしは本当のことを言う事にした。

「あの、信じてもらえないとは思いますが、ボクの後ろに、真昼さんがいるんです」

わたしがそういうと、日高父は何度かまばたきをした。

「君は真昼が既に死んでいるといったが……？」

「幽霊、というんでしょうか。赤いコートを着ていて、下は制服みたいです」

「そうか、そこにいるのか、真昼」

『……』

日高父には見えていないようだったが、幽霊少女はわたしの前に

出て日高父の前に立った。それから、真昼は日高父の首に抱きついて、頬に軽くキスをした。

「信じてくれるんですね……」

自分でも完全には信じ切れていないこの状況をあっさりと受け入れる日高父に、少し驚きを覚えた。

「本人の目の前では少し言いにくいんだが……真昼は少し変わっていてね。死んでいても、普通に化けて出てくるくらいに意思の強い性格だったから……。真昼が迷惑をかけてすまない。君、あいつに無理矢理ここに連れてこられたんだろう？」

日高父が小さく微笑んだ。遠い昔を思い出しているようにもみえる。

「はあ……。確かにそうなんですけれど」

『無理矢理ってなによー。ちゃんとパンツで契約したじゃない』

背後の幽霊少女が何か言ってるけれど無視することにした。

「ところで、その手紙って？」

話を戻そうと、日高父の手元の便箋を指差すと、日高父は思い出したように手紙を広げた。

「この手紙を、持って来るように指示したひとがあたしを殺した犯人です」

「は？」

わたしは頭が真っ白になった。

遠くから、パトカーのサイレンが聞こえてくる。

「え、え、え？」

あきら少年が慌てた様子で、あたしとお父さんのほつを交互に見やっている。

『その右手の薬指の包帯は、あたしが噛んだ時の傷を隠すためのものだよね？』

「いやだから、突き指……」

『幽霊というのはね、誰の目の前にも現れるものじゃなくて、普通は親しい人間の前に現れて、伝え残した思いを告げに出てくるか、それとも恨みのある人間の前に現れて恨みを晴らすか、そのどちらかだつて相場が決まつてるものなのよ！』

「そういうものなの??」

『お父さんですら見えてないみたいなのに、赤の他人であるはずのあなたにだけあたしが見えるなんておかしいじゃない？ つまり、あなたがあたしを殺した犯人つてわけね！ 我ながら名推理だと思っわー！』

「いやいやいや、それ違う、絶対、迷う方の迷推理だから！」

『キミの身に覚えが無くても、あたしの推理は絶対なのー！ 絶対つたらぜつたいー！』

叫んだら、なんだかすつきりした。まさか冗談で作った物が本当に役に立つとは思わなかった。もしかして、あたしの心残りつて、これがしたかつたんだらうか。

自分を殺した犯人を、自分で追い詰める！ ああ、なんて燃える展開！

つていつか普通できないよねー、こんなの。

本当のところは、あきら少年が犯人であるかどうかはどうでもよかつたんだけど。

「……?!?!」

『ノリが悪いぞ〜！　ここは観念して、動機とか殺害方法を自白するシーンでしょう？』

絶句して声も出せないあきら少年の表情を楽しみながら、小さく笑う。

「だから、僕は、」

『キミが本当に犯人かどうかは知らないけれど、ここまで付き合ってくれてありがとね』

あきら少年の頭を、胸で包み込むように抱きしめて、そっと肩を叩く。

『そうそう、約束だから、あたしのぱんつは何枚か持っていていいからね。おまけでブラも』

だんだんと、意識が薄れていくのを感じながら、最後にあきら少年に伝えるべきことを伝えた。

『さっきの手紙には、下のほうにちっさく、っていうのはウソ、って書いてあるから安心していいよ？　男の子なんだから、幽霊の性質の悪いイタズラくらい、笑って許してね』

そつと、あきら少年の頬にキスをした。

「……?!」

あきら少年がまだ何かあたしに向かって叫んでいるようだったが、もうあたしには何もわからなくなってきていた。

なんだか、光の中に溶けていくような気がした。これが成仏するってやつなのかなーとぼんやり思う。

成仏っていうのは、なんだか眠りに落ちる感覚に近いのかな、と思いつながら、あたしの意識はすうっと、落ちるように閉じた。

くだらない世間話をしながら一緒に学校から帰る途中で、突然、早苗が真面目な顔になった。

「あのさ、」と言いかけていったん口をつぐんだので、あたしは、ああまたか、と思った。

「早瀬先輩って、ちょっといいよね?」って早苗が言ったので、「いいよね」って相槌をうつたら、「私、告白しちゃう!」って言ったので「がんばれ!」って投げやりに言った。

早苗は恋多き女なので、いつでも誰かに恋している。いつも告白するのは早苗の方で、でも、関係はあまり長続きしない。

早苗は髪をちょっと染めてたり、派手な装飾品などを好むため、見た目が遊んでいる風に見えるのだけれど、実は結構身持ちが固い。たぶん男の方は、簡単にキスとかさせてくれそうと思って、軽い気持ちで付き合うことをOKするんだと思う。でも早苗は、男に何にもさせないので、結果、男の方から去って行くことが多い。そっちから告白して何もさせないのはけしからん、というのが男共の意見のようだった。

早苗はとってもいい子なのに、胸しか見られないのはかわいそうだと思う。

「早瀬先輩が、早苗のことを理解してくれる人だといいね」って言ったたら、早苗は小さくうなずいてから「まひるはさ、男の人とつきあったりしないの?」って言った。

告白して付き合っっては、ふられて泣きじゃくる早苗を慰めるのはあたしの役目なので、いいかげんあたしの方は男嫌いになってきたかもしれない。

あたしは、今はまだ、部活とかに打ち込んでるほうが楽しかったりするけれど、いつかは男の人と、あーんなことやそーんなことをするようになるのだろうか。

「今はまだいいかな。でも、早苗がうまくいったらあたしも彼氏欲しくなるかもね？」

「じゃ、私ががんばらなきゃ」

「おー、がんばれー」

がんばらなくても、あたしは困らないけどね。

「真昼、何書いてるんだ？ まさか、ラブレター、とかか？」

「弟よ、姉がそんなに恋多き女に見えるかね？」

「んじゃ、何書いてんのさ？」

「これは秘密のお手紙なのさ、ふふふん」

「へー？」

「あたしに何かあったときに、読むのじゃぞ？」

「なにそれ」

「遺言、かな？」

「は？ 真昼、お前まさか自殺とか考えてんのか？」

「んにゃ。これはあたしが急な事故とかで死んだ時用のじゃー。

そなたには隠し場所を覚えておくが、決して有事の際にしか開けてはならぬぞー？ 何でもないとときに勝手に見たらクロス。てゆうか

お前のエロ本の隠し場所おかーさんにバラス」

「みねーよ！ それにエロ本なんて持ってねーよ！」

「むむむ？ 今度中三だというのにエロ本のひとつも無いとは……

まさか姉をオカズにしているんじゃなかるうな？」

「ない。それはない。絶対」

「汚さなければパンツくらい使ってもよいぞー？」

「真昼のアホ！」

「話をもどして、この手紙の隠し場所はA - 30だぞよ。忘れるな？」

「ああ、子供の時よくやってた、あれだな？」

「ちなみに弟、貴様のエロ本はC - 12じゃな？」

「ぎゃー！」

「姉の情報網を甘く見る出ないぞ、くつくつく」

「なにが情報網なんだか……」

「他にもいろいろ秘密の手紙を仕込むから、楽しみにしておれよ、

くくく」

「なー、真昼、いつまでその変な口調続けんのさ？」

「えー？ おもしろくなかった？」

「つまんねー」

「じゃふつーにしゃべろう」

「なあ、真昼、なんで急にそんな変な手紙とか用意したんだ？
誰かに狙われてるとか、恨みを買ってるとか、なんか殺されそう
な覚えでもあんの？」

「んー？ 実は最近妙な視線を感じるよがあるのよ」

「なんだよそれ」

「まあ気のせいなんだろうけどね。なんかあつたらイヤじゃない？」

「なんかって……怖いこと言うなよ」

「まあ、ストーカーだとかそういうのじゃないにしてもさ、人間、
いつ何があるか分からないし、何かあつてからじゃ遅いから、生き
てるうちに何かしとかなきやなつて」

「ふーん」

「もしあたしが殺されたりとかしたら、犯人がわかるような手紙と
かも仕込む予定！」

「心当たりがないのにどうやって犯人書くのさ？」

「それは秘密　ところで弟よ。今日は四月一日だって知っていた
かね？」

7、幸せな女子高生の日記

???

(前書き)

少々性的な描写にご注意下さい。

7、幸せな女子高生の日記

???

四月二日

今日初めて、先輩とえつちをした。

人によってはあまり出血はしないらしいのだけれど、私の場合はちよつとびっくりするくらい出血してしまつて、先輩のベッドが血だらけになつてしまつた。

先輩に何度か「大丈夫？やめようか？」と言われたのだけれど、必死に我慢して「大丈夫だから」つて答えて、結局最後までいつた。

胸やあそこをいじられているうちは頭がぼうつとして、ただ気持ちよかつたのだけれど、いざ、本番となつてからはただ痛いだけだつた。身体を重ねるということが、こんなに痛いものだとは全然知らなかつた。でも、大好きな先輩と、はじめて一緒になれたという、ただそれだけのことが嬉しくて、私は幸せだつた。

いっぱいキスをして、いっぱい抱きしめてもらった。こんなに幸せでいいのだろうか？少し不安になるくらいだつた。

本当は今日は先輩のうちにそのまま泊まるはずだつたのだけれど、先輩の妹が急に帰つてきたので、私は汗と体液で汚れた身体もそのままに、そそくさと先輩の家を去らなければいけなかつたことだけがちよつと残念だつた。

そうそう、まひるには明日我慢しなきゃね。

私、ついに大人になつたんだよつて。

すっかり部活で遅くなってしまった。

あたしはすっかり暗くなってしまった人通りのない道路をとぼとぼと歩いてた。

もう暦の上では春なのだけれど、夜にはまだまだ冷える。あたしは友人から借りた赤いコートのフードをかぶりなおして、両手にハアと息を吹きかけた。

早苗にこのコート借りなかつたら、風邪引いちゃってたかも。

持つべきものは良き友人だ。といっても早苗には早苗で思惑があって、早瀬先輩のコートの下にもぐりこんで、アツアツで帰るんだって言ってた。

もう、見てられないよね。あたしもちょーつとあこがれてたんだけどな、早瀬先輩。

もういちど、はぁ、と手のひらに息を吐いて両手をこすり合わせる。

あたしも彼氏ほしい。こういう寒い時なんかは、背中からきゅーっと抱きしめて暖めてくれるような、そういうのが欲しいのです。

背中がさびしいよう、って思いながら、早く帰らなきゃと足を速めようとしたとき、背後でざつと何かがこすれる音がした。何だろう、と振り返ろうとしたとたんに、後ろからなにかハンカチのようなものを口に当てられた。振りほどこうとしたが力が入らない。

何？ 何？ いったい何が？

よくわからないながらも、とりあえずハンカチに思いっきり噛み付いてみる。

「……………がっ、ぐ！」

背後でくぐもった声上がるがハンカチは離れない。

そのうちにだんだんと、意識が遠くなってきて……………何もわからない

く
な
っ
た。

9、誰にも見つからなかった手記

早瀬 晶

高校二年生（17）

少々残酷な描写があります。ご注意ください。

この手帳が誰にも見つからないことを祈ると同時に、それでもわたしの罪を誰にも告げずにこの世を去ることの恐ろしさに耐えかねて、今、これを記しています。

わたしは、罪を犯しました。それも、殺人という非常に重い罪です。

殺意はありません。ですが、わたしが殺してしまった相手にではありません。

わたしは、間違ってしまったのです。殺す相手を。

殺してしまった相手の名前も素性も知りません。ですがわたしは確かに彼女の命を奪ってしまいました。胸をナイフで3回突き刺した後、下腹部を何度も執拗に刺しました。

まだニュースや新聞で死体が見つかったという話は聞いていませんが、時間の問題でしょう。

わたしが殺意を抱いていたのは、兄にしつこく言い寄る女でした。苗字は知りませんが、兄はその女のことをさなえ、と呼んでいました。いつも制服の上に赤いコートを羽織っていたので、わたしはすっかり赤いコートが嫌いになってしまいました。間違っって人を殺してしまうほどに。

あの日、あの女が兄の部屋からそそくさと出てきた日、本当ならわたしは友人の家に泊まる予定でした。その日は両親も出かけていて、兄を一人残すのが不安になったわたしは、予定を変更してうちに戻ったのです。それなのに、うちにはあの女が居て、そして出て行ったあとの兄の部屋には男と女の匂いが充満していました。

ああ、兄は汚されてしまったのだなど、この時わたしは「さなえ」を殺すことを決意しました。

長い間、兄を慕っていました。決して告げられることのない思いでありながら、それはひと時も失われることはありませんでした。

正直にいつて、自分が少々異常であるという自覚はあったと思います。実の兄に、情欲を覚えるというのは。しかし、自分が決して得られないものを横から持つていかれるというのは、正直ひどく腹立たしいものでした。

さなえを殺す準備に二週間かかりました。学校から帰る時間、通る道を調べ、眠らせるための薬品と、鉄槌を下すための武器を用意しました。

そして、川原の側の茂みに隠れて、さなえが通りかかるのをじっと待っていました。

夜はまだ冷えるので、予定よりもずいぶん遅れて赤いコート姿が見えたときには、わたしの手はすっかりかじかんでいました。

側を赤いコートが通り過ぎるのを、見つからないように息を潜めてやりすごして、3つ数えてからそつと赤いコートのあとをつけました。寒いからか、フードを深くかぶつていて顔は良く見えませんでした。コートは確かに見覚えのある、あの女の物でした。

足音を殺したままわたしは、後ろから赤いコートの女の顔に、薬品をしみこませたハンカチを当てました。ハンカチを当てた手の薬指を思い切り噛まれて、声を上げかかりましたが、すぐに女はおとなしくなり、わたしは赤いコートの女を引きずつて、川原の茂みへともぐりこみました。

最初に、コートの上から武器を両手でしっかりと握つて、思い切り胸を突き刺しました。女は一度、びくん、と痙攣してから動かなくなりました。刺してしまつてから、声を出されたり、痛みで気がついて逃げ出したりしないように、口にさるぐつわをすることや、手足を縛ることを思いつきましたが、女は最初の一突きで、絶命したようでした。

二度目以降、どこを刺しても反応がまったくなくて、人間つてこんなに簡単に死んでしまうものなのかと困惑したのを覚えています。あらかじめ掘つて置いた穴に埋めようとしたところで、女の顔が

月明かりに照らされて、このとき初めて、わたしは誤って別の人間を殺してしまったことに気がつきました。

赤いコートは確かにさなえのものでした。もしかしたらさなえの友人か何かで、コートを借りていたのかもしれない。

虚空を見つめる虚ろな眼差しが、あたしがあなたに何の悪いことをしたっていうの、と無言で問いかけているような気がして、そう思った瞬間、自身の罪の重さに気がつきました。

わたしは、何の罪も無い人間を、まちがいで殺してしまった。

しばらくその場で呆然としたあと、それでも死体は埋めなければならぬと、心の中で手を合わせながら見知らぬ少女を土の下に埋めました。

わたしが自分で自分の命を絶つ決心をしたのはこの時です。

あの売女を殺したとしても罪だなんてこれっぽっちも思わないけれど、間違って殺してしまった少女に対してはわたしは謝る言葉を持ちません。

もし神がこの世にいたのであれば、願わくば、わたしが誤って殺してしまった少女に魂の安らぎを。そしてわたしが死んだらどうか兄の娘に生まれ変わらせて欲しいです。

もし悪魔がこの世にいたのであれば、どうぞあの売女に鉄槌を。

早瀬晶

遺書なんて書くのは初めてなので、変な書き方になっていたら申し訳ありません。

わたしは、わたし自身の意思で自分の命を絶つことを選択しました。

ここにはその理由は述べませんが、そう決意するに至ったのは全てわたし自身に起因するものであり、学校や家庭、その他外部的要因によるものではないことだけをここに明記しておきます。いじめや、家庭内の不和、その他の要因があつたわけではありません。

両親へ。

十七年間育ててくれてありがとうございました。

勝手に死んでごめんなさい。わたしのことは初めからいなかったものと思ってください。

兄へ。

愛しています。愛していました。

百の言葉を費やしてもわたしの胸のうちの全てを語ることは出来ません。

どうかわたしのことを忘れないでください。

憎いあの女へ。

これが逆恨みであることは百も承知していますが、あえてあなたに言葉を残します。

しんじやえ。

追記

名前も知らない女の子へ。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。許してください。

四月

十七日 早瀬晶

11、ある殺人犯の悔恨

早瀬 晶

高校二年生（17）

少々残酷な描写があります。ご注意ください。

死に装束として学校の制服というのは何か意味深に取られないだろうかと思ひながら、服装の乱れを直した。スカーフをしつかりと結び直して、手鏡で確認する。死に化粧というわけでもないけれど、普段は使ったことも無い口紅を、コンビニで買って適当に塗りつけた。

わたしの罪を記した手帳は、おそらくきつと、誰にも見つからないだろう。

いや見つからないで欲しいと思う。

靴を脱いで、そろえて置いた。それから、遺書を靴の下に押し込む。

なんで自殺をする人って、靴を脱いでそろえて置くのだろうと少し疑問に思ってたけれど、これはある種の様式美というやつなのだろうかと深く考えないことにした。

ビルの屋上は風が強く、遺書が飛ばされないかだけが少し気がかりだった。

たいしたことは書いていないけれど、それでもわたしがこの世に残す最後の言葉なのだから誰にも見つからないなんてことはあってほしくなかった。そう思った時に、ふと、もしかして自殺する人が靴を脱いでそろえて置いておくのは、誰かが遺書を風とかで飛ばないように靴で押さえたのが最初なんじゃないかなと思った。

眼下を見下ろすと、車のライトがいくつも列になっていた。

じつと眺めていると、光の列はまるで何かの生き物のように思えてくる。

ああ、これからわたしは死ぬんだと思った。死ななければいけないのだと強く自分に言い聞かせた。

わたしは罪を犯した。その罪は決して世に明かせない以上、罪を罰することが出来るのは、ただわたしだけしかない。だから、わたしはわたしを罰するのだと。

風にスカートがめくりあがって、誰が見ているわけでもないのにあわてて押さえようととして、あ、と気がついた時には強い風に押されてわたしの体は虚空に押し出されていた。

もうちょっと、心を固める時間が欲しかったかなと、耳元をこごごとと吹きすさぶ風の音を聞きながら思う。

最後に兄のことを思いながらふと、思い出した。

神様に、兄の娘として生まれ変わりたいと願ったけれど、もしかして今のままだとあの憎らしい売女の娘として生まれてくる可能性が高いんじゃない？

あーもう、くっそー。あの女殺してからにすればよかった。あの女の子だなんてじょうだ

最後の思考が終わる前に、わたしの脳髄ははじけて飛んだ。

子供が生まれるのは明け方が多いとよく聞くが、僕の娘は夜の八時頃に産まれた。

予定日は一週間も先だったため、そろそろ休暇を申請しようかというところに不意打ちだった。僕がまだ会社にいるうちに母から連絡があつて、慌てて病院に駆けつけた時にはすでに産まれていた。

幸いにも母子共に健康に大きな問題は無く、妻は小さな娘を胸に抱いて微笑んでいた。

妻には反対されたが、娘には、今はもういない、あいつの名前をもらおうと思う。

……あきら、また会えたね。

結婚して四年。夫の仕事は順調で、娘ももうすぐ三歳になります。幸せなんでしょう、今の私は。

でも、最近とても不安でたまらなくなることがあるのです。

夫の強い希望で、娘には、亡くなった、夫の妹さんの名前をつけることになりました。

亡くなった方を悪く言うのは良くないことだと思うのですけれど、正直にいつて、私は夫の妹さんのことはあまり好きではありませんでした。

理由は分かりませんが、妹さんはなぜかいつも私のことを睨んでいた様な記憶があります。

そのせいなのでしょうが。その妹さんの名前をいただいた、私の娘がたまに妙な振る舞いをするのは。ときどき、柱やタンスの陰から、私のことをじーっと見つめるのです。

その眼差しに、亡くなった妹さんを思い起こされて、どうにも不安でたまらなくなるのです。

病院では、育児ノイローゼと診断されました。

夫のことは愛していますし、娘のこともちろん愛しています。

でも、娘は……私のことを愛してくれているのでしょうか？

だいきらいなママへ

わたしは、ママが、だいきらいです。りゆうは、きらいだからです。

だから、かいだんをあがってすぐのへやでかくれていました。わたしをさがしにくるママを、びっくりさせようとおもったのです。

かいだんをあがってきたママのまえに、わ、っていつとびだしたら、

ママは、きゃあ、といつてかいだんからおちてしまいました。

ママごめんなさい。びっくりさせてごめんなさい。いたかったですか？

ざまあみろ。

ざまあみろってなんですか？

ママのことはだいきらいだけど、パパはだいすきです。

おおきくなったら、パパとけっこんします。

だから、ママは、あんまりパパとなかよくしないでください。

あきらより

休日の午後、ソファーに寝転がってのんびりテレビを見ていたら、玄関のチャイムが来客を告げた。

妻が、「わたしが出ますよ」と言っただけだったので、「うん」と生返事で見送る。

そのままぼんやりとテレビを見ていると、パタパタと軽い音を立てて妻が小走りに戻ってきた。回覧板が何か、たいしたことのない来客だったのだろうと、あくびをしながら考えていると、居間に戻ってきた妻が少し慌てた様子で小声で言った。

「あなた、ちょっと変な子供が来てるんだけど……」

「どうした、子供って。隆の友達じゃないのか？」

ソファーから顔を上げて尋ねると、妻は眉を寄せて、俺の耳元で小声で囁いた。

「それが……、お宅の娘からの伝言があるなんて言うのよ。オレオレ詐欺ってやつじゃないかって心配になって」

……娘？ うちには俺と、妻の美津子と、息子の隆の3人しかない。

娘なんていないが……まさか？

「少し気になるな。俺が相手しよう」

俺はソファーから体を起こして立ち上がった。

うちの娘、か。もしかすると、もしかするのかもしれない。

「何か金品を要求されたわけじゃないんだろ？」

「あなた、警察に連絡します？」

不安気な顔で妻が言うので、安心するように肩をぽんぽんと叩いてやる。

「話があるというのなら、まずは聞いてみよう。心配ならお前はここにいていい」

妻にそう言って、俺は玄関に向かった。

玄関には、ジャージのズボンとTシャツを着たジョギング帰りと
いった装いの少年が所在なげに突っ立っていた。

「うちの家の娘からの、伝言があるそうですね？」

少年に声をかけると、こちらに気がついていなかったようで少し
驚いた顔で少年がうなずいた。

「はい、ええと、どう説明したらいいものやら……」
視線を宙にさまよわせながら少年が口ごもる。

「うちの娘というのは、真昼、のことだろうか？」

こちらから声をかけると、少年は神妙な面持ちで「はい」と頷い
た。

やはりそうかと思った。

「……ご存知かもしれませんが、日高真昼は、既にこの世にはいま
せん」

少年はいきなりそう切り出した。

「そうだろうと思ってはいましたが、はっきりと告げられると……
やはり苦しいものですね」

当時を思い出そうと努力する。突然いなくなってしまった姉。

事件性を疑わせる血痕が見つかったため、当時から生存は絶望視
されていた。俺は早い内に姉の死を受け入れることが出来たが、死
体が見つからなかったため、両親は、いつか、姉が帰ってくること
を期待していた。

「生前に残した手紙が、この家に残してあるとのことですよ」

「あれか……？」

手紙……。何か記憶に引っかかるものがあった。

ずっと前、何か姉と話をした記憶がある。あの時は、確か四月一
日だったこともあって、ただの冗談だと思っていたために、実際に
姉が行方不明になった時には思い出しもしなかった。

姉が、自分に何かあったときに開けるといったあの手紙は、どこ
だったか。

「真昼さんの部屋の天井裏にあるそうです」

天井裏といわれて思い出した。A - 30か！

そこまで思い出して、急に目の前の少年のことが気になった。

どうみても、うちの隆と同じ中学生か、高校生くらいにしか見えないというのに、どこで真昼のことを知ったのだろう。それに伝言というのも気になる。

「ひとつ聞いていいかな？」

目の前の少年をじっと見つめると、目を逸らすことなしに少年は俺の顔を見つめ返した。

「なんでしよう？」

「君は、真昼とどういった関係……。いや、君が真昼と関係あるはずもないか……」

真昼が行方不明になったのは、もう二十三年も前の話だ。目の前の少年はともそんな年には見えない。後で聞いてみることにしよう。

「すまないが、少し待っていてくれないか」

俺は少年にそう告げて、二階へ向かう階段を上り始めた。

真昼の部屋は二階にあつて、二十三年経った今でも当時のままに残してある。

何度か妻に片付けるように言われたが、この部屋だけは、どうしてもそのままにしておかねばならなかった。

押入れの上の段にしまわれた布団をベッドの上に下ろして、中に入つて押入れの天井の羽目板をはずす。手で四方を探ると、クツキーか何かの缶のようなものが手に触れた。

取り出して埃を払うと、缶を開けてみた。

中には家族へと書かれた青い封筒が入っていた。それともうひとつ、赤い封筒が入っていて、こちらには表面に何も書かれておらず、代わりに小さな付箋紙が付いていた。

付箋紙には、姉の字で「家族以外がこの手紙のありかを伝えに来

た場合、伝えてきた人の前でこの手紙を読むこと。それ以外の場合
は決して開けないこと」と書かれてあった。

付箋紙を取ってみると、付箋紙の裏には「弟よ、どうせ貴様は姉
の言葉を忘れていたんだろう?」と書かれていた。

当時の姉の様子が思い起こされて、目頭が熱くなった。

確かに俺は忘れていた。何かあったときには開けると言われてい
た手紙のことを、すっかり忘れていた。

だけと、真昼、四月一日に言われたことがまさか本気だなんて思
わないだろう?

二つの封筒を持って階段を下りると、少年は相変わらず所在無げ
に玄関に立っていた。

「おそらく、その手紙というのはこれのことだと思う」

少年の前に二つの封筒を示しながら片方を、家族へと書かれた青
い封筒をズボンのポケットへとしまふ。

「片方には家族へ、もう一方は、この手紙のありかを伝えてきた者
の前で読むこと、とメモ書きが付いていた。だから、こちらの方を
君の前で読むことにする」

封筒から便箋を取り出しながら、思った。

しかし、この少年は、本当に姉とどういった関係なのだろう。

じつと少年を見つめると、どこか遠い記憶に引っかかるところが
あった。

姉の友人の、水無月先輩、だったか。一年しか同じ高校には通え
なかったが、何かとよくしてくれた先輩にどこか似ている気がした。
「不思議だな。君に会ったことは無いはずなのに、誰かに似ている
気がする。……すまない、君の名前を聞いてもいいだろうか?」

そういえばこちらにも名乗ってはいなかったなと思いつながら少年に
問うと、少年はちよつと気まずげに「ボクの名前は、早瀬あきらと
います」と答えた。

「早瀬……いや聞き覚えは無いな……」

どこかで聞いたような気もするが、姉の周りで早瀬という姓は聞いたことがないと思う。

それにしても、本当にこの少年は一体何者なのだろうか。

「君はいつたいなぜ、このうちを訪ねてきて、真昼の伝言を届けるなんていうことをしているんだい？」

俺が尋ねると、早瀬少年はちょっと困った様子で背中を振り返った。

「……そうだな。真昼のことだから、学校の図書室の、本の間に秘密のメモが隠してあって、それをたどるとうちに来たとか、そういう感じだったりするんじゃないだろうか？」

あの姉なら、そのくらいの仕掛けをしてもおかしくないと思っただけだが、早瀬少年はちょっと困惑気味に、また背中の方を振り向くだけで何も言おうとはしない。

彼の後ろに、何かあるのだろうかと思っただが、特に不審なものが見えない。

首をかしげていると、なぜか小さくひとつうなずいてから、早瀬少年が言った。

「あの、信じてもらえないとは思いますが、僕の後ろに、真昼さんがいるんです」

何を言われたのか一瞬わからなかった。

「君は真昼が既に死んでいるといったが……」

「幽霊、というんでしょうか。赤いコートを着ていて、下は制服みたいですよ」

「そうか、そこにいるのか、真昼」

目には何も見えなかったが、何かそっと、俺の頬に触れた気がした。

「信じて……くれるんですね……」

早瀬少年が、ぼつりと言った。

「本人の目の前では少し言いくいんだが……真昼は少し変わって

いてね。死んでいても、普通に化けて出てくるくらいに意思の強い性格だったから……。真昼が迷惑をかけてすまない。君、あいつに無理矢理ここに連れてこられたんだろう？」

人のよさそうな少年だから、真昼に適当に言いくるめられてここまで連れてこられる様子が目に見えるようだった。

「はあ……。確かにそうなんですけれど」

少年が苦笑しながら言った。

「ところで、その手紙って？」

手元の便箋を指差されて、手紙のことをすっかり忘れていたことに気がついた。

広げてみると、姉の字で大きく、

「この手紙を、持って来るように指示したひとがあたしを殺した犯人です」

と書かれていた。

「は？」

少年の目が点になった。それから、俺と、背後を何度も交互に見る。

どう考えても目の前の少年には二十三年前に真昼を殺すことなんか出来ない。これはいったいどういうことなのだろうかと思っただころで思い出した。

真昼はなんと言うか、探偵物とかが好きなくせに、論理的な思考が苦手でいつも直感だけで犯人を決め付けていた。それも、こいつが犯人だったらおもしろいから、というのが大抵の理由で、めつたに犯人があたることは無かった。

「え、え、え？ いやだから、突き指……。いやいやいや、それ違う、絶対、迷う方の迷推理だから！ だから、僕は、ちよっと待ってよ？！」

慌てふためく少年を見ていて、当時の自分を思い出した。

真昼の推理はあてずっぽうでいて、結構説得力あったりするんだよな。

さすがに今回のハズレと言わざるを得ないけれども。

「……あ」

「どうしたんだい？」

「えーっと。あの」

少年が言いにくそうに言った。

「僕、犯人じゃありませんから。あの、その、手紙の下のほうに、ウソって書いてあるって、真昼が」

混乱しているようだったので、落ち着かせるつもりで微笑んでみる。

「慌てなくても大丈夫。君が犯人だなんて思っていないよ。俺の言葉は真昼に聞こえているのかな？　今回はハズレだったねと伝えてくれるかい？」

「あの、あの、その、真昼さんが、その消え、ちゃって」

「そうか……自分の仕掛けに、見事にはまってくれて、満足していつちゃったのか」

いかにも姉らしい成仏の仕方だと思った。

「う、う」

早瀬少年は、何度もまばたきして、両手で顔を押さえつつずくまった。

「大丈夫かい？」と声をかけたのだが返事がなく、やや異常なその様子に俺は居間にいるはずの妻を呼んだ。

「美津子、すまん、ちょっと来てくれ」

倒れかけた早瀬少年を支えようと少年に手を伸ばして、初めて俺は勘違いをしていたことに気がついた。

女の子だったのか。

意識の無い少女の身体に無闇に触れるわけも行かず、俺は妻が来るのを待って、少女を部屋に運んだ。

目を覚ましたら、いつものあたしの部屋だった。

一瞬、あれーっと思う。あたし、幽霊やった気がするんだけど？
頭がはつきりしない。

枕元の目覚まし時計を確認すると、変な時間で止まっていた。起き上がって壁掛け時計を見るものの、そちらも同様に止まっているようだった。

えーっと、今日は四月十七日の金曜日だったはず？ 学校ある日だよな？

正確な時間は分からないものの、体内時計の感じでは七時前くらいな感じ。

金曜日は朝練ないし、少しは余裕あるかも。

顔を両手でパンと叩いて気合を入れる。

まったく、妙な夢を見たものだ。

あたしが殺されて、幽霊になって、犯人に復讐だなんて、マンガか何かの読みすぎなのかな。

大きく伸びをして馬鹿みたいに大きく口を開けてあくびをする。

なんだか、ものすごく長いこと眠っていた気がする。まずは顔洗おう。

階段を下りて洗面所に入ると、浴室の方に肌色の影が見えた。

弟のヤツ、男のくせに朝シャンかい。

じゃばじゃばと顔を洗いながらふと気がついた。なんか微妙に違和感が？

シャワーを浴びたいところだったけれど、弟が出てくるまで待っていていられるほど時間に余裕はないだろう。タオルで顔をこしこしと拭きながら着ていたTシャツとジャージを脱いで洗濯機に放り込む。ついでにブラとパンツも脱ぎ捨ててから、あたしこんな下着持ってたっけ？と疑問に思ったが、気にしないことにして浴室のドアを開

ける。

「っな、誰？」

抗議の声が上がるが気にせずあたしは弟からシャワーを奪った。

「弟よ、男の癖に朝シャンなどと軟派なことをするでない。姉に譲ってとつとと出て行け」

「????？」

目を白黒させている弟にシャワーをかけてやって、泡が落ちたことを確認してから浴室から追い出した。

「!!!!????？」

なんか文句を言っているようだがシャワーの音で何も聞こえないということにする。

あたしは内側から鍵をかけてのんびりと身体を洗い始めた。

あれ、あたし、髪の毛こんなに短かったっけ？

すっかりいい気分で出てくると、用意した覚えもないのに脱衣所に替えの下着が置いてあった。

弟よ。なかなか気が利いておるではないか。

ぱんつを履きながら、そういえば誰かにぱんつをあげる約束をしたような気がすると思いついた。誰にだったかなーと思いつながら、ぱんつ一枚にタオルを首にかけただけで部屋に戻ろうとしたところで弟と鉢合わせした。

ガラにもなく、真っ赤な顔で、なにやら口をぱくぱくとさせている。

「金魚のまね？」

聞いてみたが弟は首をふるふると横に振った。

「あ、そうそう、着替えの用意ありがとね」

言いながら弟の横を通り過ぎると、なにやらじつとあたしを見つめている様子だったので、「姉に欲情するなよ〜?」って言ったら何かわめきながら居間の方に行ってしまった。

部屋に戻って、制服に着替えると、何か足りない気がした。早苗にコートを借りたような覚えがあるんだけど、どこにやったかな？

クローゼットの中をのぞきこみながら、なんだか妙に暑いし、返すのはまた今度でいいかなと思ひ直して扉を閉める。

階段を下りてキッチンに入ると、新聞を広げたお父さんが、なぜか広げた新聞ではなく妙に優しい顔であたしの方を見つめていた。「おとうさん、おはよ。あたしの顔になんかついてる？」

ぺたぺたと自分の顔に触れてみるが特に変なものがくっついていない様子は無い。

「いや、ちよつとね。なんだかとても懐かしくて」

「へんなの？」

変なお父さん。

「あ」

キッチンの壁掛け時計を見上げて、思っていたよりも時間がやばいことになっているのに気がついた。

「ゆっくり食べてる暇ないや。このパンもらうね」

お父さんの前に置かれたトーストをえい、とかつさらって口にくわえる。

「行儀が悪いな」

お父さんは口ではそう言いながら、笑っていた。

どたどたと、足音を立てて玄関に向かうと、既にカバンが置かれてあった。

「ナイスだ弟よ。なにか忘れてるとおもったら、カバンの用意だったか。」

ほとんどの教科書は学校に置いてあるので実は空っぽに近かったりするのだが、やっぱり手ぶらで学校に行くのはあんまりだしね。

玄関のドアを開けて、珍しく見送ってくれた父親に、ふざけて敬礼をしながら言った。

「じゃ、いつてきまへす」

今日もいつもと変わらない一日が始まる。

ふと目を覚ましたら、知らない場所だった。

ここはどこだろう？

自分が体を動かす感覚はないのに、目に映るものが流れていく。ビデオカメラで取った映像を見せられているような感覚だ。

なんだかいろいろ、見てはいけないものも見てしまったような気がするし、見せてはいけないものを見せてしまった気がする。

誰かと言い合いをして、挨拶をして、パンを一切れ口にくわえて、そして玄関から一步外に出た瞬間に我に返った。

「……ボクはいつたい、何を？」

今、わたしの中から、誰かが出て行った気がする。

振り返ると、よく見知った玄関に、まるで父親のように思えるけれど見慣れない男の人が立っていた。

「ごめん、真昼、泣かないって言う約束、守れなかったよ……」

日高さんが、涙を流していた。

その後ろに、知らない少年が真っ赤な顔で立っていて、わたしが持っているカバンをじっと見つめていた。

「ごめん、これ君の？」

少年にカバンを差し出すと、ん、とうなずいて少年はカバンを受け取って玄関から出て行ってしまった。

「あの、」と日高さんに声をかけると、顔を右手でぬぐいながら日高さんは「ありがとう」と言った。

わたしには何かなんだかわからなかった。

でも、心の奥の、もっと奥の所で、何か少しだけ償いが出来たよ
うな気がしていた。

まず初めに。これは遺言のつもりで書いています。なので、もしこの手紙が発見された時点でまだあたしが生きているのなら、苦笑いをして元の場所に戻して置いてください。

そして、この手紙を見つけたことを忘れてください。

よろしいでしょうか？ この先、あたしが死んでいることを想定して続けます。

これを書いている時点では、事故や病気などで急にあたしが死んでしまったことを想定しています。今のところその気はまったくありませんが、あたしが自殺をしようと思った時にはまた別の遺書を用意しているはずです。その際にはこの手紙はあたし自身の手で処分する予定なので、あたしの死因が自殺とされたにも関わらずこの手紙が見つかった場合、それは自殺では有り得ませんのでしっかりと再調査をお願いします。

これを読んでいるのが、あたしの両親なのか、弟なのか、それともまったく縁のない赤の他人なのか、これを書いているあたしには分かりません。

あなたが赤の他人であるのであれば、どうかこれ以上読み進めることなしに、あたしの家族にこの手紙を渡してください。それがかなわない場合はこの手紙はこれ以上読まずに燃やしてしまってください。こんな恥ずかしいものは他人に読まれたくありません。

勝手に読んだら呪いますよ？

ここから少し、赤の他人の方が、ついうっかりこの先の文章を目に入れてしまったりしないように、念のため行を空けておきます。

これくらい空けておけばいいよね？ 赤の他人のあんたは今、呪われた！

これは大好きな人から、死んじゃえー、って言われちゃう呪いです。これ以上ひどい呪いを受けたくなければ今すぐこの手紙を読むのをやめてください。

ここからは、あたしの家族だけが読んでいるものとして書きます。まず、謝ります。ごめんなさい。あなたたちより先に死んでしまっただごめんなさい。

それから今まで育ててくれた両親に最大級の感謝を。

あたしは、あなたたちの娘として生まれて幸せでした。たくさんの愛をありがとう。

与えられた愛に対するだけの愛をあなたたちに返せていたでしょうか。

どういう理由でどういう原因であたしが死んだのか、これを書いている時点では分からないけれど、どんな理由であたしが死んだのだとしても、どうか誰も恨まないで下さい。

憎しみは、人を不幸にします。仮に事故や何らかの事件であたしが死んだのだとしても、あたしは幸せだったと断言します。

あーもう、恥ずかしい。生きてるうちに書くもんじゃないねこう
いうの。

でも、信じてください。本当に、わたしは、幸せでした。

弟へ。強く生きる。それから、女の子を泣かさないように。

お前はなぜか姉を基準に女の子を計っている節があるけど、あ
たしを基準にしていると、普通の女の子は泣いちゃうぞ？ 好きにな
った子にはやさしくしてあげなさい。

それから、お前だけはあたしの墓前で泣くことを禁じます。両親
は泣いてもいいけれど、お前だけは笑っていてください。約束だぞ？

最後に。ここまで読んでしまった赤の他人のあなたは死の呪いを
受けました。これはとても強力な呪いでどんなに健康な人であつて
も百年以内に死んでしまう呪いです。

何年後に死ぬかは神の味噌汁つてやつですけれど。いつ発動する
か分からない呪いにおびえつつ残りの人生を歩んでください。

本当の最後の言葉。

ありがとう。さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524ba/>

とある通行人の悲劇

2012年1月1日01時46分発行